

授業科目の内容及び担当教員

区分	授業科目	指導教員	講義等の概要	回数	
必修 教育科目	医科学概論	コーディネーター 教授 和田郁夫	概要	大学院外の様々な学歴を持つ学生に対して、医学の各分野を学習するために必要とされる生命科学の概念と方法論、さらに現代医学の成り立ちと全体像について概説する。	全16回
		教授 和田郁夫	「生命科学概説」	急速に進展してきた生命科学が明らかにした生命像について解説する。	2
		教授 藤野美都子	「研究倫理」	科学研究に対して社会的に要請される科学的合理性および倫理的妥当性について考える。	1
		准教授 福田俊章	「環境倫理」	環境倫理の多様な展開を概観し、生命の価値をめぐって生命倫理とはまた違った形でなされる倫理的アプローチがあることを見たい。	1
		講師 末永恵子	「医学史」	西洋医学モデルを取り入れた日本の近代医学の歴史を概説し、その光と影にも言及する。	1
		教授 岡田達也	「数理解析」	種々の生命現象が微分方程式を用いてモデル化され、多様な手法で解析され理論的な説明が与えられる。本講義では医学に関係する具体的な問題を題材に、数学的モデル化の方法とその基本的解析法を講義する。	2
		教授 小林恒夫	「医学物理学入門」	医学・医療分野で必要とされる物理学の基礎知識と、その応用例をいくつか紹介する。具体的には、X線CT・レーザー・MRIなど医療機器のしくみ、ポディメカニクス、心臓の仕事率、放射線と放射能、などを扱う。	2
		教授 清水研明	「英語文章論」	英語のパラグラフと日本語の段落を、トピック・センテンスと中心文の違い、修辞構造の違いを中心に論じる。又、英語科学論文の文章構造についても言及する。	1
		教授 亀田政則	「Presentation in English: An Introduction」	本講義は英語を用いたプレゼンテーションの基礎能力向上を目的とする。さらに、現在話題になっている医学・環境トピックスに関するショートエッセイを提出することを求める。	2
		教授 落合威彦	「生命と生物の進化」	進化によって生物は多様化・複雑化し、ヒトを頂点とした多種多様な生物群が生じた。化石の情報や現世生物の比較形態学、比較生理学的解析に加え、遺伝子の直接比較へと方法論も進歩し、進化速度や分子系統樹などの新概念が確立した。分子進化学の中核をなす中立説について概説する。また、形態形成遺伝子の進化などの具体例も紹介する。	2
		教授 大戸音	「臨床医学のダイナミズム論」	臨床医学は疾病の治療(悪性腫瘍、感染症、動脈硬化性疾患、機能不全など)を基本として、加えて技術論(精神的サポート、疼痛からの開放、事故の予防など)までも守備範囲としてきた。臨床医学の発展の経緯と将来について展望・講義する。	2
	生体構造学	コーディネーター 教授 八木沼洋行 教授 和栗聡	概要	人体を形成する細胞、組織、器官の正常構造、およびそれらの形成過程を学び、機能との関連を考察する。	全21回
		教授 和栗聡	「細胞の構造と機能」	本講義では、細胞の基本構成要素である細胞膜、核、ミトコンドリア、その他の細胞内オルガネラについて、その構造と機能を概説する。また、これら構造を支える分子機構やその動的な側面についても言及する。	2
			「細胞の構造と機能」	細胞は分化によってその形を変え、また細胞が巧妙に配列することによって特定の機能を有する組織あるいは器官となる。本講義では、4大組織(上皮、結合組織、筋組織、神経組織)の基本構造に加え、代表的な器官の組織構築について学ぶ。	3
			「組織の構造と機能-実習」	本実習では、代表的なヒトの組織標本を光学顕微鏡や電子顕微鏡を通して観察する。また、実際に組織切片の作製を体験する。	4
		教授 八木沼洋行	「人体の構造と機能」	人体解剖学を学ぶことは医学研究の第一歩である。本講義では人体の構成要素である骨、筋肉、血管、末梢神経、および各種内蔵について、肉眼レベルの観点から概説する。	3
			「人体の構造と機能-実習」	実際に人体解剖実習を行い、人体構造についての理解を深める。	3
			「神経系の構造と機能」	本講義では中枢神経系に焦点を絞り、その肉眼レベルにおける基本構造および神経の伝導路について概説する。	2
			「神経系の構造と機能-実習」	実際のヒト脳および脊髄を用いて解剖実習を行ない、中枢神経系の構造と機能についての理解を深める。	2
		「人体発生学総論」	人体の最終形態を理解するには、その形成過程を追って理解することが重要である。本講義では、ヒトの生殖形成から器官形成が始まる発生第3-4週までの変化、および代表的な器官の形成過程について概説する。	2	

区分	授業科目	指導教員	講義等の概要	回数	
必修 教育 科目	生体機能学	コーディネーター 教授 挾間章博	概要	人体における様々な臓器(心臓、呼吸器、消化器、腎)の機能を細胞・分子レベルから個体レベルまで学び、それぞれの臓器が生体の生存においてどのような役割を果たしているか理解する。	全15回
		教授 挾間章博	「一般生理学概論」	人体の機能を臓器・組織・細胞レベルで理解する上で必要となってくる知識を学ぶ。とくに、本講義では、物質輸送の基礎に重点をおいて説明する。	1
			「神経・筋の膜生理学」	人体の機能を臓器・組織・細胞レベルで理解する上で必要となってくる知識を学ぶ。とくに、本講義では、物質輸送の基礎に重点をおいて説明する。	2
		准教授 山崎将生 講師 勝田新一郎	「循環生理学」	循環器すなわち、心臓・脈管系の構造と機能について学習する。マクロのレベルの機能から単一細胞レベルの機能までを理解する。	3
			「呼吸生理学」	呼吸器すなわち、肺・気道についての構造と機能について学習する。臨床検査と結びつくマクロレベルの呼吸機能を理解し、さらに肺胞を形成する各細胞を単一細胞レベルで理解する。	3
		教授 挾間章博 教授 三宅将生	「消化・吸収の生理学」	消化器すなわち、口腔から大腸に至るまでの消化管の構造と機能、および、肝臓・胆嚢・膵臓の構造と機能を学習する。マクロのレベルの消化機能から単一細胞レベルでの栄養素輸送機構までを理解する。	3
	「腎生理学」		泌尿器のうち、とくに腎臓の構造と機能について学習する。腎機能検査と結びつくマクロレベルの腎機能の理解と、腎尿細管・集合管における単一細胞レベルでの水・溶質再吸収および分泌の仕組みを理解する。	3	
	病態病理学	コーディネーター 教授 錫谷達夫	概要	病気の原因(病因)と生体防御(免疫)の両側面から病変の成り立ちや病気の発症メカニズムを学習する。	全16回
		准教授 北條洋	「病理学概論」	病気の病因と病態、病変の成り立ちについての基本的な病理学的知識を習得するため、細胞傷害、炎症・感染症、循環障害、物質代謝障害、病理検査法について学習する。	5
		教授 阿部正文	「腫瘍病理」	腫瘍についての基本的な病理学的知識を習得するため、腫瘍の原因、腫瘍の分類、良性と悪性腫瘍、浸潤と転移、腫瘍の疫学について学習する。	5
		教授 藤田禎三	「免疫学」	免疫学とは自己と生体に侵入した非自己(病原体)を識別し、その病原体を生体から排除するために機能する。免疫には特異性と記憶を特徴とする獲得免疫と生体に生まれつき備わっている自然免疫がある。これらはお互いに関連し、生体に侵入した病原体を排除する。このような免疫学の基礎となる物質、特に抗体等の蛋白質の構造とその遺伝子について学習する。	3
		教授 錫谷達夫	「医学微生物学」	細菌やウイルスの構造、増殖法を学び、ヒトに疾患を起こす微生物の概要を理解する。また、滅菌・消毒法を理解し、感染を予防する方法を知る。	3
	代謝栄養学	教授 橋本康弘	概要	ヒトの各臓器はタンパク質、糖質、脂質などの栄養素を固有の代謝的経路を持って異化あるいは同化している。この過程は酵素レベル、遺伝子発現レベルなどのさまざまな調節を受けている。この調節機構と代謝経路の概略を学び、ヒトの生理的また病理学的な代謝の背景を理解する。この調節機構と代謝経路の概略を学び、ヒトの生理的また病理学的な代謝の背景を理解する。 代謝栄養学を理解するために必要な基本的な知識を概説する。 1) タンパク質やその構成要素としてのアミノ酸 2) 糖質化学の基礎である単糖と多糖 3) 生体膜や貯蔵エネルギーとしての脂質 などについての構造や代謝の基礎知識を確認する。	全8回
	医学研究 方法論	コーディネーター 教授 小林和人	概要	医学、医療のさまざまな分野で必要となる生化学、分子生物学的な実験技術について、その原理と応用を理解する。代表的な実験技術について、講義と実習を有機的に組み合わせて学習する。代表的な実験技術について、講義と実習を有機的に組み合わせて学習する。	全56回
		教授 小林和人	「遺伝子導入と形質転換技術(1)」	大腸菌を利用した組換えDNA技術の基本操作について解説する。細菌へのプラスミドの導入、プラスミドの単離、制限酵素マッピング、DNAの切断と連結、ハイブリダイゼーションなどの操作の原理を解説する。	1
			「遺伝子導入と形質転換技術(1)-実習」	大腸菌へ薬剤耐性遺伝子を持つプラスミドDNAを形質転換し、得られた耐性コロニーからプラスミドを回収する。また、プラスミドの構造を解析するために制限酵素マップを作製する。	3
			「遺伝子導入と形質転換技術(2)」	哺乳類細胞へのDNAの導入技術(リン酸カルシウム法やエレクトロポレーションなど)について解説する。また、導入した遺伝子の発現の解析法やその機能を解析するための実験技術を紹介する。	1
			「遺伝子導入と形質転換技術(2)-実習」	哺乳類細胞へリン酸カルシウム法によりプラスミドDNAを導入する実験技術を実習する。プラスミドとしてGFPを発現する遺伝子を利用し、導入後一過性に発現するGFPの蛍光を観察する。細胞内において導入した遺伝子からタンパク質の合成される機構を考察する。	3
		教授 本間好	「遺伝子構造解析技術(1)」	簡便な遺伝子増幅法として生命科学などで広く用いられているポリマーゼ連鎖反応(PCR)について解説する。また、実際の解析方法や実際に社会で用いられている応用例などについて紹介する。	1
	「遺伝子の構造解析技術(1)-実習」		ポリマーゼ連鎖反応(PCR)を用いてDNA断片を増幅する技術を実習する。併せて、プライマー設計方法、PCR反応条件、用いる酵素の特性などを理解する。	3	

区分	授業科目	指導教員	講義等の概要	回数	
必修 教育 科目	医学研究 方法論	教授 本間好	「遺伝子の構造解析技術(2)」	DNA一次配列を決定するための原理や方法、解析装置などを解説する。また、得られた配列情報の解析方法やデータベースの使い方などについて学ぶ。	1
			「遺伝子の構造解析技術(2)-実習」	PCRで増幅したDNA断片をラベル化し、DNAシーケンサーを用いてDNA断片の一次配列を決定する。得られた配列情報をデータベースを用いて解析することにより、DNA断片を同定することを実習する。	3
		教授 和田郁夫	「遺伝子発現・イメージング技術(1)」	遺伝子情報発現とその制御の方法について、原理とその応用例について講義する。	1
			「遺伝子発現・イメージング技術(1)-実習」	mRNAの定量をリアルタイムPCRによって行う手法と、その解析の実際を実習する。また、siRNAを用いた遺伝子発現抑制実験についてもを行い、リアルタイムPCRを用いて発現量の測定を行う。	3
			「遺伝子発現・イメージング技術(2)」	生体成分のイメージング技法の原理として、基礎となる光学と、顕微鏡の仕組みを学習し、その応用について講義する。	1
			「遺伝子発現・イメージング技術(2)-実習」	培養細胞に強制発現させた特定の局在を示す蛍光タンパク質を、生細胞において共焦点顕微鏡により観察する手法について学習する。また、組織、培養細胞の免疫染色についても実際に行い、様々な顕微鏡を用いた微細構造の観察方法について学習する。	3
		教授 錫谷達夫	「遺伝子発現調節解析技術」	遺伝子発現の調節機構の基本を理解し、その解析法を学ぶ。	1
			「遺伝子発現調節解析技術-実習」	遺伝子発現調節の1つとして、エンハンサーの活性についてルシフェラーゼアッセイを用いて解析する。	3
		教授 藤田禎三	「タンパク質発現解析技術(1)」	各種の分画法・クロマトグラフィーによるタンパク質の分離・精製の原理を学ぶ。また、精製したタンパク質の電気泳動やゲルろ過法による分子量等の推定、N末端アミノ酸配列の決定について、原理と応用例を学ぶ。	1
			「タンパク質発現解析技術(1)-実習」	生体試料からのタンパク質の精製と、電気泳動法およびクロマトグラフィーによる分子量およびサブユニット構造等の解析法を実習する。また、タンパク質の生物活性の測定法を実習する。	3
			「タンパク質発現解析技術(2)」	モノクローナル抗体およびポリクローナル抗体の作製法と、抗体を用いた特異タンパク質の検出・定量法の原理と応用例を学習する。	1
			「タンパク質発現解析技術(2)-実習」	抗体を用いたウェスタンブロット法、ELISA法、オクタロニー法、ロケット免疫電気泳動法等による、生体試料中の特異タンパク質の検出・定量法を実習する。	3
		教授 橋本康弘	「タンパク質修飾解析技術(1)」	生体内のタンパク質の半数以上が糖鎖修飾を受け、糖タンパク質として存在している。本講義では糖鎖修飾の代謝について、細胞小器官との関連を含めて解説する。	1
			「タンパク質修飾解析技術(1)-実習」	糖鎖修飾されたタンパク質の性質やその糖鎖構造のレクチンを用いた解析方法を学ぶ。	3
			「タンパク質修飾解析技術(2)」	タンパク質の中には部分的な分解によって活性が調節されるものがある。このような限定分解について、疾患との関連を含めて解説する。	1
			「タンパク質修飾解析技術(2)-実習」	プロテアーゼが基質に働いて限定分解を行うプロセスを培養細胞系あるいはin vivoの実験系を用い、ウェスタンブロット法にて検出する。	3
		教授 小林和人	「個体レベルの遺伝子機能解析技術()」	遺伝子改変マウスは、特定遺伝子の生理機能の解析や疾患モデルの開発のために有益である。マウス初期胚に遺伝子操作を施し、その胚を偽妊娠雌マウスの卵管あるいは子宮に移植することによって遺伝子改変マウスを作製することができる。本講義では、初期胚を利用した遺伝子操作技術の概要を解説する。	1
			「個体レベルの遺伝子機能解析技術(1)-実習」	マウス受精卵を採取し、胚盤胞まで培養する技術を習得する。排卵を誘発した雌マウスの卵管より受精卵を採取し、インキュベーター内で培養する。培養下で進行する初期胚の発生を観察する。	3
			「個体レベルの遺伝子機能解析技術(2)」	胚性幹(ES)細胞は、初期胚(胚盤胞)より分離された細胞株で未分化な性質を保持した状態で培養することができる。ES細胞は、特殊な培養条件下で培養することにより、さまざまな細胞タイプに分化誘導することができる。ES細胞での相同組み換え法を用いて、標的遺伝子に任意の変異を導入することができる。本講義では、ES細胞を用いた遺伝子ターゲティング法の原理について解説する。	1
			「個体レベルの遺伝子機能解析技術(2)-実習」	ES細胞を未分化な状態で、増殖させる実験を行う。細胞の融解、継代、凍結の方法を習得する。また、ES細胞の培養に必要なフィーダー細胞として利用する繊維芽細胞の取扱いについても習得する。	3

区分	授業科目	指導教員	講義等の概要		回数
必修教育科目	医学研究方法論	教授 本間好	「R実験技術」	放射性同位体を利用した実験方法に関する講習を受ける。	1
		教授 錫谷達夫	「組換えDNA実験技術」	組換えDNA実験に関する法令および実施の方法について講習を受ける。	1
		准教授 片平清昭	「動物実験技術」	動物実験に関する法令および実施の方法について講習を受ける。	1
		教授 小林和人	「最先端研究法」	最先端の研究を紹介し、その視点の広がり、新たなアプローチ法、その過程について学習する。	1
	医学医療情報学	コーディネーター 教授 岡田達也	概要	近年ITの進歩により、医療の現場は電子カルテの導入など急速なコンピュータ化が進んでおり、医学医療のさまざまな情報が迅速に入手可能となった。さらに、情報科学の発展は複雑な生命現象の解明に応用し得るようになった。本講義ではそのような医療情報システムの現状と、情報から医学的な課題についての決意思決定に際し重要な役割を果たす医療統計、およびIT技術を使って細胞内分子を解析するバイオインフォマティクスについて解説する。本講義ではそのような医療情報システムの現状と、情報から医学的な課題についての決意思決定に際し重要な役割を果たす医療統計、およびIT技術を使って細胞内分子を解析するバイオインフォマティクスについて解説する。	8回
		講師 竹内賢	「医療情報技術の発展の”光”」	医療は従来医療者と患者の一対一の関係の中で成立してきた側面があるため、閉鎖的、また医療者と患者との情報格差が大きすぎるなどといったさまざまな問題が指摘されてきた。しかし、今日、発展する情報・コミュニケーション技術は医療現場を急速に変貌させてつづる。ここでは医療における情報化の必要性、現状、応用などを福島県立医科大学附属病院での実例も紹介しながら概観し、電子カルテを利用した患者情報の統合や共有化、薬剤や医学文献などの情報検索、安全管理、遠隔医療など医療の質や安全性の確保、患者サービスの向上などに、情報技術がどのように貢献しているか、現状と近い将来の展望について紹介する。	1
			「医療情報技術の発展の”影”」	情報化された医療現場においては、大きなメリットがもたらされる半面、大量の個人情報流出する危険や、不適切な閲覧等によりプライバシーが侵害される危険などが飛躍的に高まった。ここでは個人情報保護や安全性の確保、医療の質の確保のために医療情報システムが備えるべき条件と、医療関係者が遵守すべき法、倫理について説明し、医療情報システムの適正な使用・構築のために必要な知識を学ぶ。	1
		教授 岡田達也・講師 安達隆	「統計的仮説検定の考え方、検出力とサンプルサイズの設計、分散分析・多重比較」	統計的推測の意味と仮説検定の基本的な考え方解説し、検定結果を合理的に解釈するために必要なサンプルサイズの設計法について解説する。また、検定法としては具体的なデータをもとに多重比較法を扱う。	3
		教授 和田郁夫	「バイオインフォマティクス」	現在ではヒトを始めとして多くの生物のゲノム配列が決定され、さらに各生物の様々なレベルでの遺伝子発現の多様性に関するデータベースが次々と構築されてきている。このような激しく拡大しつつある膨大な生命要素関連情報を利用することによって、生命活動を理解するための新たな方法論が生まれつつある。本講義ではその内容について概説し、医学への応用例を紹介する。	3
	健康医学概論	コーディネーター 教授 福島哲仁 教授 志賀令明	概要	人の健康は、身体と精神の両面でもとらえるのみならず、人間社会に暮らす生活者として社会面からもとらえる必要があり、健康をテ - マとする医学研究は、広い視野が要求される。本講義では、健康の概念を広くとらえ、様々な健康問題とその背景について学習し、またそれらをテ - マとする医学研究の方法論について解説する。本講義では、健康の概念を広くとらえ、様々な健康問題とその背景について学習し、またそれらをテ - マとする医学研究の方法論について解説する。	15回
		教授 福島哲仁	「予防医学・健康医学」	人の健康状態は、主体である個人と周りの環境との相互作用によって常に変化している。また、ヘルスプロモ - ションという観点から考えると、健康行動やライフスタイルも、主体である個人と環境との相互作用によって方向付けられている。このような主体と環境との相互作用という観点から、様々な健康問題、疾病の原因究明とその予防に取り組む研究を行うものとする。	1
			「医学的研究デザイン論」	研究の概念を体系として理解するという観点から、様々な健康問題、疾病の原因究明とその予防に関する医学的研究のデザインについて学習する。研究のデザインを考えるにあたって、重要な研究テーマを考え賢明な研究方法を工夫する創造性、研究目標と現実の研究条件のバランスに関する適切な判断、研究を遂行する上での現実感覚などが求められる。本講義では、研究テーマの設定やそれに対する現実的な研究デザイン、対象の選択、測定方法の選択などの判断力を身につけてもらうことを目的としている。	1
		教授 安村誠司	「Evidence-based Public Health」(科学的根拠に基づく公衆衛生)	科学的根拠 (Evidence) は、地域における公衆衛生学上の問題を見つけ、必要な公衆衛生活動の優先順位やその効果の検討に、大きな示唆を与える。 1) 疫学の古典的事例であるブロードストリートコレラ事件から、科学的根拠に基づいた公衆衛生活動の基礎を学ぶ。 2) 当講座が関わっている県内外の保健活動事例から、Plan-Do-Seeのサイクルに基づいた公衆衛生学活動について学ぶ。	1
			「疫学と統計の基礎」	科学的根拠 (Evidence) に基づいた公衆衛生活動に、疫学と統計の基礎知識は欠かせない。 本講義では; 1) 疫学調査のデザインについて学ぶ。 2) 得られたデータのまとめ方について学ぶ。	1

区分	授業科目	指導教員	講義等の概要	回数
必修 教育科目	健康医学 概論	講師 栗崎恵美子	「法中毒学の基礎」 法医学は異状死体の検案解剖を扱う。異状死体並びに救急患者では、薬毒物が関連するもの少なくない。法中毒学は、これらの薬毒物を鑑別する上での基礎になる。	1
		教授 平岩幸一	「法病理学の基礎」 法医学は異状死体の検案解剖を扱う。異状死体には犯罪による死体、犯罪が疑われる死体とともに、突然死も含まれる。法医学病理学は、これらを鑑別する上での基礎になる。	1
		教授 志賀令明	「対人関係における臨床心理学的視点」 人格は、知・情・意の総体であると言われる。そのなかでも情と意に関する部分は性格と呼ばれ、その性格を基礎づけているものに気質と呼ばれる概念がある。ここでは古典的な気質概念として、クレッチマーの気質の3類型に関して学習し、それぞれの気質が対人関係に与える影響性を考える。さらに、クロニンジャーの気質概念についても触れ、人間の特に情動傾向に関する生物学的因子が対人関係に与える影響を考える。	1
			「不安の意味と不安障害・心身症・行動化」 人間は欲求充足体制に基づいて行動するが、欲求充足行動は必ず障壁に遭遇する。欠乏・喪失・葛藤などが代表的な障壁としてあげられるが、欲求充足体制が障壁に遭遇して欲求阻止が生じた場合、欲求不満状態が形成される。欲求不満は心的な防衛機制を経て形を変えるが、その場合、緊張・不安が出現することが多い。その不安に関しては、三つの表現形があるとされ、一つは体験化、二つ目は身体化、三つ目は行動化であるとされる。ここでは不安の三つの表現形に関して症例を呈示しながら考察する。	1
			「離乳期の対処不能経験と抑うつおよび自律神経系・内分泌系・免疫系の変化」 臨床心理学ないしは精神分析学の分野では特に幼少体験が重視されることがあるが、近年の研究では離乳期の対処不能経験は成熟後の抑うつ準備性を高めるだけでなく、内分泌系・免疫系にまで影響を与え、ガンの発症や骨量減少などに関係が深いことが分かってきた。ここでは精神神経免疫学の視点から、離乳期の対処不能体験(外傷体験)が扁桃体や視床下部 下垂体 副腎系に与える影響について考察し、こころと身体が極めて深い関係にあることを理解する。	1
			「発達段階に応じた入院患者のストレス」 人間の一生はいくつかのライフサイクル(ライフステージ)に分類され、それぞれの段階にはそれに応じた発達課題があると考えられている。新生児から乳児期では前項で学習した生体の防御反応などの形成に大きく影響する母子相互作用の問題があげられ、幼児期以降老年期に至るまで、人生各期での発達課題はさまざまである。入院という事態ではそれまで営まれてきた日常生活から一旦離れ、「病者役割行動」に沿った行動が要求される。いわば「喪失」と新たな役割の「獲得」の双方に直面しなければならない。このストレスがそれぞれの発達段階でどのような影響を与えるかを理解する。	1
			「抑うつと精神病理」 抑うつを精神病理学的に説明する概念として、クレッチマーの「循環気質」、テレンバッハの「メラノコリー親和性格」などがあるが、近年クラウスは「うつ病患者での役割依存性」という概念を提唱した。クラウスは(そう)うつ病患者の基盤に対人関係障害が潜在することを仮定し、その心的防衛として「対人関係を円滑にする道具としての役割性」に過剰に一体化すると考えた。その結果、たとえば役割喪失のような状況が起こると、彼は自己存在の意義を見失い、うつ病を発症するに至ると考えた。このような「役割依存性」に代表される心的配置が発達のどの段階でできあがってくるのか、その過程を考察する。	1
		非常勤講師 島田睦雄	「生活習慣と冠状動脈疾患」 いままでもなく現代社会は「生活習慣病」の時代である。基本的には肥満に原因するメタボリックシンドロームが動脈硬化を引き起こし、心筋梗塞などの虚血性心疾患に結びつくが、いわゆる「タイプA」と呼ばれる一群の人々もまた、この虚血性心疾患の予備軍であると言われる。特に「潜在する攻撃性」や「時間的な切迫感」などが交感神経系を刺激し、血圧の上昇や冠状動脈のれん縮に結びつくと考えられているが、心筋梗塞を起こすタイプAと狭心症を起こすタイプA行動特性には微妙な差が存在するという。特に職業との関連でその傾向が見られるという報告があり、その点を含めて詳しく考察する	1
		非常勤講師 岩崎祥一	「認知の歪みと認知行動療法」 特に対人関係において、ある行動やしぐさ、ないしはことばがどのように受け取られるかは人によって千差万別である。ある状況をその人なりに受け止める仕方を「認知」と呼ぶが、この認知のあり方の基盤に歪みがあると、同じ出来事でも自分にとって極めてネガティブであるようにとらえられる場合もある。特に、「全か無かの思考」「自責思考」「破局化思考」などのような認知の歪みの基本パターンを有している場合には、その人の人生はつくづく暗いものになりやすい。ここでは認知の歪みについて概説すると共に、認知行動療法の具体的な方法について理解する。	1
		教授 志賀令明	「現代社会と人格の発達」 現代社会は、テレコミュニケーションの時代である。しかも物質的には極めて豊かになり、自動車による移動や、スーパー・コンビニなどでの買い物など、自己の身体性の枠組みを超えたところでわれわれの生活が行われるのが当たり前という時代になった。このような変化は1970年代から始まり、現代は「自己愛の時代」であると同時に「自己愛障害の時代」であるとも言われる。このような日本の社会や文化の変化を追いながら、日本人、特に青年期にある人たちが示してきたさまざまなこころの問題は、社会・文化の変容と密接にかかわっていることを理解する。特に「統合失調症」「摂食障害」「人格障害」の歴史的な推移に関する理解を深める。	1
非常勤講師 菊池武烈	「カウンセリングと社会心理学」 前項で述べたように、現代社会はさまざまな問題を孕んでいる。かつてはサブカルチャーと呼ばれたものが一般化し、価値観の多様化は極限にまで推し進められていると言って良い。人間の思考や行動は、その人が生まれ育った社会と、その社会の中に機能している価値体系(文化)との相互作用で形作られる。現代社会は「自己愛障害の時代」であると同時に「解離」の時代であるとも言われる。ここでは特に若者層で「解離」現象が多く出現する社会・文化的な背景と、「解離」を前景にしなが生活する若者に対するカウンセリング的な接し方を理解する。	1		